

人との出遇い、本との出遇い

附属図書館長 津留宏道

私が初めて“図書館”を利用したのは中学一年生（昭和17年）の時であり、友人と大阪市の区民図書館へ出かけた。友人は肥爪建君といい、大変な秀才であった。その後、いろいろな出来事があったが、図書館利用がきっかけで彼は生涯を契る友となった。

図書館は古くて、閲覧室も20人くらいしか座れないし、板張りの床は歩くとぎしぎし音がした。床に塗られた油のにおいととも、夕陽の射す静かな部屋を懐かしく思い出す。ここは中学校の図書館と違って自由に書庫に入ることができた。実際にはそんなに多くはなかったであろうが、私の目には万巻の書とわづらった。当時、「星の誕生と死」に興味をもっていたので天文学の本を読んだが、通常の望遠鏡ではなく、磁力線やX線で観察する新しい観察法の記事があり、まことに印象的であった。間もなく閉館時間となったが、館員の方が親切で優しく、それ以来図書館のイメージは私にとって好ましいものとして残っている。第二次世界大戦のため大阪市は灰じんに帰し、私の生家の寺院も全焼し、図書館もその位置さえわからなくなってしまった。

旧制高校時代はスポーツに精を出し、あとはもっぱらアルバイトをした。図書館では専攻の理科ではなく、哲学書を読んだ。よく理解できないのだが、友人と論争をするために片っ端から読んだ。論争の相手も私もよく判らないままの青春談義である。

昭和25年に大阪大学へ入学し、医学部図書館へ入ってみた。蔵書は専門書ばかりであったが、敗戦後に見た分厚い金の背文字のドイツの解剖書などは、これぞ“学問”という思いがした。しかし、医歯系学生はまず学名な

どの記憶が大切であり、参考書は自分で買うことが多く、図書館はあまり利用しなかった。

翌年の夏休みに歯磨会社のアルバイトをした。研究所長は大阪大学理学部教授を兼ねた小林正久先生であり、学問的にも人間的にも立派な方であった。一人ひとりを自室に呼んで立体模型を指さしながら時を忘れて有機化学の講義をされ、私には文献的に歯ブラシの研究をするよう命じられた。そのためほうほうの図書館で歯ブラシに関する本を探し歩く毎日となった。このような本は一般の図書館にも大学にもなく、困惑して歯学部教授松村敏治先生に助言を乞いに行った。先生はとくに義理人情に厚い方であり、先生から岡本清纓先生（後の愛知学院大学教授）を御紹介いただいた。岡本先生の焼け残った土蔵で歯ブラシの毛の種類、太さ、先端の形態、毛束の間隔など毎回懇切丁寧に説明され、あとは詩や俳句、絵の話などになり、尽きることがなかった。先生にアメリカ文化センターの存在を教えられ、夏休みの終わりにここでついに“Tooth Brush”というすばらしい本に巡り合うことができ、驚喜乱舞の思いがした。今もお三方の御恩を忘れることができない。以上が私の青春時代における人と本との出遇いである。

さて、広島大学の大半は広島市から東広島市へと移転し、図書館も広島大学の英知を象徴するような構想をもって建設にとりかかっている。新入生諸君にも、人との出遇いと同様に広大図書館において生涯の師や友となるような本との出遇いがあるようにと祈っている。諸君からも図書館に対してぜひ新鮮な頭脳で良いアイデアを提供してほしいと切に希望する。